

「山川&二宮ICTライブラリ」を活用したafterコロナの授業モデル

金間 聖幸

PowerPointはプレゼンツールの1つである。そしてわれわれの教育活動は「生徒がおこなう」学習以外は、今までもこれからも同じプレゼンである。よく「ICTの活用」の仕方がわからないという声を聞く。生徒は多様な方法を使っていくことになるが、教員ができる「ICTの活用」はこれまでの板書などをパソコンでPowerPointなどのプレゼンツールに「おきかえる」以上でも以下でもない。我々は「ICTの活用」を過度に警戒する必要はないのだ。

ただ確かに「おきかえる」データがあると楽なのも事実である。そこで今回はそのデータを集約した「山川&二宮ICTライブラリ」（以下、ICTライブラリ。詳細は本誌の裏表紙を参照）を活用した授業を提案していきたいと思う。

授業構成

世界史Bの「満州事変」の単元を扱い、表1の構成にそって説明していく。

	学習活動
導入	教師:the Story's「大枠の提示」
展開1 ×2	教師:the Presentation「講義型授業」 生徒:the Reflection「振り返り」
展開2	生徒:the Structure「協働学習」
まとめ	生徒:the Restructure「論述」

表1 授業構成

〈導入〉 今回の学習指導要領改訂の世界史探究の性格は、「世界の大きな枠組みと展開の理解について理解を深めて、地球世界の課題とその展開を探究する力を養うことをねらいとして設置された」とある。そこで導入の“the Story's”では、授

業の大枠と、教員が提示する主題について説明をおこなっている。その際にICTライブラリのスライド(資料1)と動画を利用している。

〈展開1〉 展開1は、“the Presentation”としてPowerPointのスライドショーとプリント(資料2)を用いた講義型授業をおこなっている。ここで先ほど利用した資料1のスライドを再度、差し込むことで、今どのあたりを話しているのか、導入と連動して流れを確認できるようにしている。

その後“the Reflection”として生徒どうしがペアで授業の振り返りとわからなかった点を確認しあう。こうしたアウトプットの過程を設けることで理解の定着をはかっている。板書をやめてスライドを活用することで、今まで50分の授業内容が5～10分に短縮した。それを1回の授業で2回繰り返している。

〈展開2〉 展開2では、“the Structure”として授業で実際の入試問題に協働で取り組む。ここでICTライブラリに収録の『世界史 地図・図解問題集(入試基本問題 全76題／入試発展問題 全63題)』等の問題を活用している。また、「一問一答」や「10分間テスト」も収録されており、それを生徒へは振り返り用に配布して活用している。

〈まとめ〉 最後のまとめでは、“the Restructure”として論述をおこない、全体的な大枠の確認をしている。

スライドショーのデータはGoogle Classroomで配信し、オンライン授業にも対応できる授業展開としており、afterコロナの授業モデルとして構築した。

資料 2 授業プリント(内容説明 5 分・ビデオ10分)

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

D (4) 第 2 次世界大戦と諸地域の変容 (ア) | 6. 満州事変

満州事変 1931.9-39.5

契機 | 1931.9 [¹柳条湖事件] by 関東軍…奉天郊外の柳条湖で満州鉄道を爆破
 首謀 | <板垣征四郎> <石原莞爾> 『世界最終戦論』
 政府 | <若槻礼次郎> 内閣は不拡大 ← アメリカ・イギリスとの対立を恐れる。
 拡大 | 関東軍、政府を無視して満州全域を占領
 影響 | <若槻礼次郎> 内閣総辞職 (12) → <犬養毅> 内閣成立 (1931.12-1932)
 派生 | 1932.1 第 1 次 [²上海事変] …中国人が日本人僧侶を殺傷 (日本側の謀略)
 ※列強の目を満洲からそらす → 上海停戦協定 (.5)
 国連 | 1932.2 [³リットン調査団] の派遣 (～.7) | イギリス・アメリカ・フランス・ドイツ・イタリア |
 建国 | 1932.3 [⁴満州国] の建国 都) 新京「長春」・執政 (→皇帝 1934) < ⁵愛新覚羅溥儀>
 理念 | 五族協和 (日・漢・満・蒙・朝)・王道楽土 → 実質、日本の傀儡政権
 影響 | 1932.5 [⁶五・一五事件] by 海軍青年将校…「満州国」不承認の<犬養毅>暗殺
 影響 | 政党内閣の終焉→<斎藤実> 内閣 (1932-34) …海軍大将による挙国一致内閣
 政府 | 1932.9 日満議定書…日本が満州国を承認・日本軍の駐留・権益の確認
 国連 | 1932.10 リットン調査団の報告…「満州国」否認・日本の軍事行動は不要・権益は認める。
 1933.2 国連臨時総会…「満州国」否認・日本の撤退勧告を採択 (賛成 42・反対 1)
 結果 | 全権 <松岡洋右> 勇退 → [⁷国際連盟] 脱退通告文 (1933.3 → 発効 1935)
 拡大 | 1933.2 熱河作戦…<張学良> をやぶり、熱河省 (華北) を満州国へ組み込む
 終了 | 1933.5 塘沽停戦協定 | 日本 - 中国 | …満州事変の終結

ビデオ 1

ビデオ 2

ビデオ 3

ビデオ 4

ビデオ 5

ビデオ 6

※ビデオ 1「満州事変」

ビデオ 2「上海事変」

ビデオ 2「リットン調査団」

ビデオ 4「『満州国』の成立」

ビデオ 5「日満議定書の調印」

ビデオ 6「国際連盟脱退」

※ □ はスライドを指し、数字は導入時に利用したスライド番号を指す。表記された場所で、再度スライドに戻り、説明するようにしている。

※ ●●●●●●●●●● は今回の説明用に挿入しており、実際の授業プリントには表記されていない。

※動画を PowerPoint に挿入する方法



071 満州事変と日中戦争(西南学院 改)

次の文の()に適語を入れ、問いに答えよ。

1929年に勃発した世界恐慌の影響を受け、日本国内でも農民の窮乏や労働者の失業が問題となり、社会情勢は極めて不安定なものとなった。(1)年9月18日、日本の関東軍は中国東北地方を占領するために(2)で鉄道を爆破し、満州事変を引き起こした。翌年には清朝最後の皇帝である(3)を擁立して「満州国」を建国し、(4)を新京と改め、首都とした。
〈一部抜粋〉

資料3 『世界史 地図・図解問題集』

史の場合、地名と人物名の区別が難しいため人物名は〈 〉で表記している。なお、空欄は山川出版社の用語集で赤字になっている単語にしている。

またPowerPointのスライドは、そのまま印刷し授業プリントにできるように、縦横比をA版サイズ横にしておき、それを2枚あわせてA4版となるようにしている。それによりプレゼンと配布資料の一体化をはかり利便性を向上させた。

PowerPointは、スライドショーの最中でも画面の拡大・縮小が容易にできる。そのためフォントサイズは気にしなくとも大丈夫なのだ。その結果、別々に作成するのと比べて時間短縮になり、さらに生徒もプリントのどこを説明されているのかがわかりやすい。説明の際に必要なならば、そのICTライブラリのスライド(資料1)に飛び、また同じプリントに戻るように構成した。

基本的な授業の流れでは、スライド(資料1)→ビデオ→プリント(資料2)の順番で説明している。人の記憶は視覚的情報から入る方が効果的であるため、その順番にしておき、かつビデオで説明してある部分は簡略化し時短もはかっている。

ICTライブラリのスライド(資料1)の一番効果的な点は、プリントをつくる手間を簡略化したい箇所や学校によっては飛ばして教える内容について、スライドで大枠の説明ができる点だろう。とくに今回のような世界史の授業で、満州事変などの日本国内の説明を入れたい場合には有効である。〈展開2〉 展開2では、たとえば資料3のような問題をICTライブラリからダウンロードでき、それを活用して問題演習を協働で実施している。

入試問題は範囲が多岐にわたっているため、そ

のまま利用するのは難しく、探すのも一苦勞である。筆者もそこにかかなりの時間を割いてきたが、ICTライブラリの活用で、3年生の終わりや補習期間に回しがちだった演習が容易にできるようになった。受験期ではないこのタイミングではどのように出題されるかを理解することを着眼点にしているため、問題をそのまま活用している。

〈まとめ〉最後のまとめは論述をおこなっている。『学習指導要領解説 地理歴史編』では、「世界恐慌の各国の対応を比較する」とあるので「なぜ、満州事変をおこなったのか、国内外にそれぞれの視点で説明せよ」という主題を立てた。日本の問題点を国内外で整理させて、イギリスやアメリカ、ドイツ、イタリアなどそれぞれの対応を別な授業で整理させていくことで比較・検証させる。その対策の差異がやがて大戦につながる流れをとらえさせることで学習指導要領の目標を達成させたい。可能ならば生徒にICTを活用させて論述を「共有」していくとさらに効果的であろう。

おわりに

ICTライブラリの活用で仕事への物理的・時間的負担とICT化への心理的負担を軽減することができる。この画像付きのスライドや動画をみせるだけで今までの教育とは大きく違う印象を生徒へ与えることもできる。ただ、冒頭の繰り返しになるが、本質は今までと同じであり、チョーク&トークがプレゼン&トークに変わったに過ぎない。生徒の「ICT活用」と教員の「ICT活用」を混同せず、に今までの教育の成果を継承してほしい。

(かなま・としゆき/さいたま市立大宮北高等学校教諭)